

宮のだいばん所に奉り侍ける、

中納言資綱略歌

〔金葉和歌集九〕しほゆあみににしのうみのかたへまかりたりけるに、○中

平康貞女○歌

〔吾妻鏡十八〕建永二年○承元正月十八日甲午將軍家○源二所御精進始爲浴潮給御濱出也、

〔攝津名所圖會一〕住吉郡○中

〔六月十四日〕此日近世より諸人社頭に群參し、住吉浦の潮水に浴し、百病平愈を禱るに靈驗炳然し、

〔潮湯土人曰〕これを御祓の神輿洗といふ。又説に云此日熊野本宮の温泉に涌出るとぞ、

〔新撰字鏡水〕泝、瀉、同、桑故反去逆流而上曰泝、

〔類聚名義抄五〕游、瀉、同、也、行字加夫、又於興支、

〔伊呂波字類抄於水〕游、瀉、同、也、行水申也、

激、浴、瀉、潛、涉、延、潤、浮、潤、浮、行也、古、涵、瀉

〔亦作遊、巴上同〕

〔書言字考節用集八〕游、瀉、同、也、行水申也、

游、瀉、同、也、行水申也、

余

〔書言字考節用集八〕游、瀉、同、也、行水申也、

游、瀉、同、也、行水申也、

余

〔倭訓栞前編四十五〕およぐ、游をいふ、泳字もよめり、新撰字鏡には瀉もよめり、押よぐる義にや、

列子林注に、游は拍浮者也といへば、おふすと義かよふ成べし、俗におひがくともいへり、

〔類聚名義抄五〕溺、慾、音、シツム、タ、ヨフ

〔伊呂波字類抄於字〕溺、水、溺、名、オホル、イ

〔書言字考節用集八〕溺、水、溺、名、オホル、イ

〔古事記上〕故其猿田毘古神坐阿邪訶、此三字以時爲漁而於比良夫具、夫以音

鹽故其沈居底之時名謂底度久御魂、度久二字以音其海水之都夫多都時名謂都夫多都御魂、字以音其都下四

阿和佐久時名謂阿和佐久御魂、久以音自阿至